

ホスト社会沖縄と南米系日系人 (2)

——南米系日系人のネットワーキングと社会関係資本——

琉球大学 崎濱佳代

1 目的

この報告の目的は、沖縄県内に在住する南米系日系人を対象として行った調査から得られた知見を報告することである。沖縄県には、推計 1000~1200 人ほどの南米系日系人が居住しているとみられる (2015 年末現在)。先行研究から沖縄県に在住する南米系日系人は他県の事例よりもホスト社会に包摂されてはいるが、あくまで「同じウチナーンチュ (沖縄人)」であることを求められており、ホスト社会のネットワークに参入するために同化志向的に振る舞う傾向が指摘されている。しかし、ネットワークを社会関係資本として捉えるならば、南米系日系人の有する異文化は架橋的資本としての価値を持っているのではないだろうか。本研究では、以上のような視点に基づき、結束的な沖縄社会において、異文化を背景に持つ南米系日系人がどのようにして自文化を表出し、社会関係資本を築いているのかを明らかにする。

2 方法

そこで、本研究では、本人に移動経験があり現在沖縄県内で社会人として生活している南米系日系人を対象とした聞き取り調査を行った (詳細は鈴木報告を参照)。本報告では、この調査で得られた語りのうち、「困ったときの相談相手」と「求職・転職の際の支援」を社会関係資本の指標として分析する。また、ネットワーキングのツールとして「SNS の利用状況」と「遊び」の機能について検討する。

3 結果

分析の結果、対象者は日系人社会・沖縄社会の両方に社会関係資本を持っているケースが多く、さらに SNS を活用して出身国とのネットワーク (親族や幼馴染) をも保持しているケースが多かった。その中で自身の子供に対して意識的に南米系日系人としてのルーツに触れさせるような働きかけを行っている。ただ、ほとんどの対象者は日本の公教育を活用しており、日系人社会や出身国との社会関係資本は子供へのラテン文化の継承の機能を十分果たしているとは言えない。職歴については、一度沖縄の親族の元に身を寄せて体勢を整えた後、他県での出稼ぎ労働や県内でのアルバイトを経て、親族や職場の元同僚などの紹介でキャリアアップを果たしている。民間企業では、その信頼関係の上で沖縄的な職場慣行に変化をもたらすことを意識している対象者もいた。また、余暇においてはラテンアメリカ的な遊び (ダンス、フットサル) を日常的に行っており、遊びを文化資本として日系人 - 沖縄の地域住民 - ラテン系米軍人に至るネットワークを築いていることが明らかになった。自文化の表出・発信の場として観光産業を位置づけ、ラテン文化が沖縄観光の中で存在感を増し得ると考える対象者もいたが、多くは観光産業としてでなく文化交流としてラテン文化を発信したいとの意向が強い。

4 結論

以上の結果から、沖縄県在住の南米系日系人は日系人仲間とホスト社会との双方に信頼できる社会関係資本を築いているといえよう。顔の見えるネットワークを通じた求職は、彼らの異質性を了解した上で受け入れる職場環境につながっている。社会関係資本構築における「遊び」の機能として、異質性が架橋的資源としての価値を持つことと、言葉が多少不自由でも感情を共有し信頼感を育めることが指摘される。沖縄県の産業構造から日本語が不得手な場合はかなり抑制的な生活を強いられるが、そのような日系人も遊びを通じてホスト社会とのネットワークにつながる事が可能となっている。